

二一世紀の社会と日本語

——ポライトネスのゆくえを中心に——

宇佐美まゆみ うさみ まゆみ

新しい世紀——さまざまな変化が兆す社会環境の中で、当然日本語も変わっていくだろう。

しかし、わたしたちは日本語に対して、単に傍観者の態度をとっているわけにはいかない。

どのような日本語を使う社会にしたいのか、自ら求めていくことが大切である。



一 はじめに

二一世紀を目前に控え、最近ますます新聞・雑誌にぎわしている三つのキーワードとも言える言葉に、「情報化」「少子化」「高齢化」がある。「情報化」は、チャットなどの新しいコミュニケーション方法と、それに応じた新しい言語使用の型を生みつつあるとともに、既に、これら新ツールにおいては対面コミュニケーションと比べて、対人配慮の少ない攻撃的言語行動が多く見られるというような問題を生み出して

いる。「少子化」は、幼少期における同世代間の対面コミュニケーションの減少をも意味し、そもそも人と交わる際に必要な対人コミュニケーション・スキルの習得に影響を与えることが懸念されている。また、「高齢化」は、世代間コミュニケーション・ギャップにかかわる問題を増大させる可能性もある。さらに、もう一つのキーワードに、今や手垢にまみれてしまった「国際化」という言葉がある。しかし、この言葉に新しい視点も加えて別の言葉にすると、「多文化共生への視点」になると筆者は考えている。つまり、外に目を向け

て異なる文化・社会と交流すると同時に、国内への異文化の流入、国内における価値観の多様化も認めた上で共生をめざすという姿勢と、そのための社会環境創りという視点である。しかし、これに関連しても、変化の過渡期には、異文化接触に関わる諸問題が生じるとともに、それに応じてコミュニケーションのあり方も変化を余儀なくされることが予想される。

このように、現在進行中の社会環境・社会構造の変化が、「対人コミュニケーション」のあり方に大きな影響を与えることは必至である。そして、それは、人間の「言語使用」に変化を引き起こし、ひいては、「言語自体」にも変化をもたらす可能性もある。「社会環境・社会構造の変化」↓「対人コミュニケーションのあり方の変化」↓「言語使用の変化」↓「言語変化」という大まかな構図である。

二 人間の意思が言語使用や社会に及ぼす影響の重要性

しかし、ここで筆者が強調したいことは、この構図のように、社会環境・社会構造の変化が、いかに言語や対人コミュニケーションに影響を与えるかということよりも、むしろ、

それとは逆方向の変化を生み出す可能性のほうにしっかりと目を向ける必要があるということである。「二一世紀の社会と日本語」を考える際には、それが「どうなっていくのか」という傍観者の視点ではなく、それを「どうしたいのか」という「意思」のほうが重要であると考えてからである。つまり、価値観の変化が言語と言語使用に変化をもたらし、それが対人コミュニケーション、人間関係のあり方にも変化を引き起こし、ひいては、社会のあり方にも影響を与えることができるという視点である。このことを自覚することが、今ほど重要な時はない。

これまでにない「急速」な情報技術の発展によって、「人間とコンピュータ、あるいは、人間以外の媒体を通してのコミュニケーション」がその比重を増していく中、現代社会は、既に、情報格差の問題や、対人コミュニケーションの希薄化という問題を生みつつある。本来その技術を活用し有効に活かすべき「主体」としての人間が、表面的な便利さや市場原理に流されることなく、人間の根源的な問題として「人と人とのコミュニケーションのあり方」を真剣に考え、言葉や人間関係のあり方についての哲学を持って、情報化社会、

少子高齢化社会、多文化共生社会を生きる態勢をつくるという積極的な意思を持たない限り、二一世紀の社会も日本語も、空虚なものになってしまおうだろう。

言葉や対人コミュニケーションのあり方についてのビジョンに関わる視点として重要なものに、「人権」「多文化共生」「平等意識」がある。二〇世紀も終盤を迎えた昨今、未だに首相や閣僚の「問題発言」が跡を絶たないこの国の「二一世紀の社会と日本語」に、まず求められるのは、「人権に配慮した言動」であり、自らの言動は「アカウンタビリティ（説明責任）」を負うということをしつかり自覚するということである。また、「多文化共生」を心地よく実現させるためには、異なる価値観を尊重しあうことを前提とした「平等意識」を、「言葉にも反映させる」ことが重要である。本特集のいくつかには、このような視点が打ち出されているはずである。

さて、本稿では、このような視点を踏まえた上で、自然会話データに現れた敬語使用の傾向から現代日本人の価値観を探るとともに、今後のポライトネスのゆくえを予測する。自然会話には、人間関係のあり方に関する現代日本人の「無意

識」の価値観が反映されていると見るからである。また、その価値観、意思を実現させるために必要となってくる新たな課題についても論じたい。

三 人間関係を楽しむ円滑に保つための言語行動としての「ポライトネス」

ここでは、未だ誤解されていることも多いブラウンとレビンソンの「ポライトネス」の捉え方を簡単にまとめておく。「ポライトネス」は、「いく」「いらつしやる」というような言語形式の丁寧度を扱う概念ではなく、「相手の気分を害さないように、コミュニケーションを楽しむ、円滑に進めるための言語方略」と定義される。故に、日本語の「丁寧さ」という訳語は当てはまらない。彼らは、人間には、コミュニケーションに関わる「基本的欲求」として、「他人から理解、共感、称賛されたいという欲求（ポジティブ・フェイス）」と、「他人に立ち入ってほしくない、邪魔されたくないという欲求（ネガティブ・フェイス）」の二種類があるとし、これらを満たすように、「相手に配慮する言語行動」を、それぞれ「ポジティブ・ポライトネス」、「ネガティブ・ポライト

ネス」と呼ぶ。

例えば、人に話しかける時に、「お忙しいところすみませんが、ちょっとよろしいでしょうか」という前置きをつけることは、邪魔されたくないという相手のネガティブ・フェイスに配慮しているので、「ネガティブ・ポライトネス」になる。これは、相手によっては、「忙しいとこ、悪いけど、ちょっといいかな」というくだだけた表現でもよい。ポライトネスの観点からは、これらの例における「言語形式の丁寧度」は、ポライトネスの度合いではなく、相手との関係を指標していると捉える。「ポジティブ・ポライトネス」は、相手との距離を縮めたいという欲求に働きかける言語行動であるから、例えば、「そのネクタイ、素敵ですね」と誉めることなどがこれにあたる。親しいからこそ言える「お、たまには、いいネクタイすることもあるんだな」というような表現も、実質的には相手を誉めているので、やはり、「ポジティブ・ポライトネス」になる。また、「冗談を言う」ことは、相手と共通基盤があることを示し、相手を楽しませるよう配慮していることにもなるので、典型的な「ポジティブ・ポライトネス」とされる。

このように、相手を心地よくさせるために使われる言葉は、くだけた言語形式を使っているが、「ポジティブにポライトだ」と考える捉え方が、ブラウンとレビンソンのポライトネス理論の斬新な点である。「敬語を適切に使用する」ということは、社会におけるお互いの位置をわきまえて、相手の立場を侵さないということになるので、全体として、「ネガティブ・ポライトネス」になるとされる。「ポライトネス」という観点から見ると、日本語における「言葉遣いのマナー」のすべてであるかのように捉えられてきた「敬語使用」というものは、主要ではあるが、その一部にすぎないと考えられるのである。「ポライトネス」である誤解しがちで、「言葉遣いの丁寧さ」「敬語使用」ということを刷り込まれている日本人にとっては、このような「ポライトネス」の捉え方は、頭ではなかなか理解しにくいようである。しかし、私たちの身近にある「会話」をよく観察してみると、失礼のないように敬語を使っている場合にも、相手の話を促すように適度なあいづちを入れたり、「ね」を用いて共感を表したり、心的距離を縮めたい時には、親しみを表せる常体を交えるなどの様々なポジティブ・ポライトネスの方略

を、無意識のうちにも用いていることが分かる。相手への共感を表すような発話では、「それは、面白いです!」と敬体で言うよりも、「それは、面白い!」と常体で言うほうが生き生きする場合もあるし、言語形式の丁寧度が下がったからと言って、必ずしも失礼になるわけではない。また、「どちらへ?」というような最後まで言い切らない言い方も、状況にもよるが、「どちらへいらつしやるんですか?」の「いらつしやる」という敬語を回避し、心的距離を縮めたいという心理を反映しているとも見ることが出来る。若者には、親しくない人、親しくなりたくない人に、敬語を使うという感覚もあるくらいである。これらの言語行動は、従来敬語使用を中心とするネガティブ・ポライトネスが重視された「日本語のコミュニケーション」において、ポジティブ・ポライトネスがその比重を増しつつあることを示している。そこには、「形式ばらない、気さくで、対等な人間関係」への志向というものが見えてくる。

かわかわらず、女性のほうが男性より有意に多く尊敬語等を用いていた。

- (3) 尊敬語等の使用と敬体の使用は、相手の年齢・社会的地位による有意差を示さなかったのに対して、常体の使用率は、目下に対して有意に高かった。

- (4) 女性同士を比較すると、三〇代、四〇代と比べて、目上と話している二〇代の話者の尊敬語等の使用率が最も低かった。

ここで注目すべき点は、(2)(3)(4)の結果がいずれも、敬語使用が相手への待遇を表すものであるという原則に即していないという点である。(2)は、初対面の会話における敬語使用は、今日では、相手への待遇よりも、話者がアイデンティティを帰属させている社会的下位集団(性、世代等)の言葉遣いのスタイルを指標する機能を強めていることを示している。また、(3)の結果は、初対面の会話で、相手への待遇をより顕著に表しているのは、尊敬語等や敬体の使用ではなく、常体の使用であることを示している。つまり、相手による使い分けは、「目上に対して敬語をより多く用いるのではなく、目下に対して常体をより多く用いる」という傾向を示してい

四 社会人の初対面二者間会話における敬語の使用と回避に反映された現代人の心理

Usami (1999) は、話者間の力関係(年齢・社会的地位の差)がいかに言語行動に影響を与えるかを「ディスコース・ポライトネス」⁽³⁾という観点から分析するため、35歳のベース(女性12名)に、それぞれ同性、異性の「目上(45歳)」「同等(35歳)」「目下(25歳)」の計6通りの初対面の相手を割り振り、約15分ずつの会話、合計72会話を採集し、その冒頭部を分析した。協力者は、大学(院)卒、有職で東京共通語話者の男女延べ144名であり、大まかには、規範的な言語使用に忠実な層のデータと捉えられる。

以下に結果の一部を紹介する。

- (1) 72会話における各スピーチレベルの使用率は、尊敬語や謙讓語を含む発話(以後、「尊敬語等の使用」とする)が5・10%、敬体のみの発話が55・65%、常体の発話が5・10%、中途終了型発話など丁寧度を示すマーカーのない発話が25・30%であった。

(2) 年齢・社会的地位の評定結果に男女差がなかったにも関わらず、(4)の結果は、目下と話している四〇代女性よりも、目上と話している二〇代女性のほうが「尊敬語等を含む発話」の使用率が低いという点であり、今後、初対面の会話においても、尊敬語等を含む発話の割合が徐々に減少していくことを予測させる。

フォローアップ・アンケートでは、相手の年齢と社会的地位の五段階評定を求めたが、全体的に社会的地位のほうが年齢より高めに評定される傾向があった。例えば、相手の「年齢」は「かなり下」と評定しても、「社会的地位」は「少し下」あるいは、「だいたい同じ」と評定するというような傾向が見られたのである。さらに自由記述には、「相手の社会的地位などというものを評定することに抵抗がある」「社会的地位を評定することは、長さや重さを比べるようなものだ」等のコメントも見られ、比較的高学歴の協力者の「平等意識」がよく表れていた。そういう意識が、社会的に規定されている上下関係を自ずとマークすることになってしまふ敬語使用を無意識的にせよ回避する傾向を生み、それが、丁寧度を示すマーカーのない発話が、全体の25・30%をも占めるという結果や、相手の年齢・社会的地位にかかわらず敬語

を同程度用いるという結果となって表れていたと考えられる。しかし、ある意味で初対面の会話の規範から逸脱している「常体」を交える頻度が、対目下に有意に多かったという結果は、ポジティブ・ボライトネスは、目下に対して表しやすいいことを物語っている。目上に対しては、規範から逸脱しないように常体の使用は最低限に押さえ、ネガティブ・ボライトネスを守りつつも、中途終了型発話を巧みに用いて敬語を回避することによって、隔たりを少なくしようとしている傾向が見られた。相手の年齢や社会的地位の違いは、敬語使用それ自体には反映されず、むしろ、常体を交える頻度に有意に反映されていたのである。また、スピーチレベルシフトや話題導入の頻度という談話レベルからしか見られない「動的」な言語行動が、話者間の力関係をより顕著に反映していることも明らかになった。

五 ポジティブ・ボライトネス化社会の日本語の課題

「最近、敬語の使い方が乱れている」という嘆きの声は、「いつの世」にも聞かれるようである。そういった議論では、常に過剰敬語や尊敬語と謙譲語の混同など、「言葉の形式」

に焦点が当てられ、その「正誤」が論じられる。しかし、なぜ、そのような誤用が生まれてくるのかという誤用の背後にある「心理」を探ろうとする議論はあまりない。「言葉の形式の丁寧さを重視する文化」というものは、一見礼儀正しく見える一方で、丁寧な「形式」さえたくさん使っておけば、なんとなく丁寧に聞こえるだろうという「安易な」心理も生み出す。それが、「過剰敬語」のような誤用となって表れ、また、一人ひとりが、相手に配慮した表現を「工夫する」心遣いがなおざりにされてしまうという現象も生む。このような傾向は、既に最近の店員などの「マニュアル言葉」に表れている。それを心地よく思わない人が多いのは、簡単に言うとは、彼らの話し方は、敬語を使っているが、ボライトではないからである。つまり、状況に応じた相手への「配慮」が全く感じられないのである。

しかし、敬語使用が日本語母語話者にとっても難しく、いつの世にも誤用が絶えない最も大きな理由は、その使い分けの基準が、年齢や社会的地位の上下というような旧来の社会的価値観に規定された「人間関係の認知の仕方」に基づいており、そこに「個人の価値観」を反映させる余地がないとい

うことにある。つまり、「社会的に決められた」基準で、相手を上と見るか下と見るか、ウチと見るかソトと見るか等を強制的に判断させられ、それを一発話ごとに「言語形式」に反映させなければ、「正しい」敬語使用にならない仕組みになっているからである。しかし、現在では、年齢と在社年数や社内での地位との関係が以前のように比例関係をなさなくなり、高齢の社会人学生が若い教師に指導を受けることなども増えてきた。社会の多様化ともあいまって、人間関係も複雑化し、個人の価値観もますます多様化してきているのである。このような変化が進む中、「旧来の社会的価値観に規定された人間関係の認知の仕方」に基づく敬語の使い分けの「基準」や「原則」は、現状に則さず、既に適用困難になってきているのである。

それにもかかわらず、繰り返し行われる「敬語の意識調査」などでは、大多数の人が、「今後も敬語は必要である」と答える。だが、それは、「現状」の日本社会で無難に生きていくためには敬語が使えることが必要だという、教育や現状認識から導き出された「意識」の反映であって、敬語そのものの根本に未だ残る人間の上下を区別するという前近代

な価値観を認識した上で、それを必要とする「意識」の反映とは見なせない。むしろ、実際の会話における敬語使用の傾向には、このような意識調査の結果とは裏腹に、現代の日本人が実に巧みに敬語を回避しながら、旧来的な価値観に基づく上下関係を言語によってマークすることを避け、年齢や地位の違いにとらわれず、対等な言葉で話そうとしていることがよく表れているのである。そこには、未だ明確には意識化されていない「言葉の民主化」への「意思」が見える。

現代の日本社会は、若い層を中心に、上下関係にとらわれない、気さくで、対等な人間関係が好まれる「ポジティブ・ボライトネス社会」へと変容しつつある。そういう変化の中で、敬語が乱れていくのではないかと心配するむきもある。しかし、言葉が民主化され、ポジティブ・ボライトネスの比重が増していくということは、決して、相手を思いやらない、ぞんざいな話し方が横行するようになるということではない。むしろ、「個人の意思」を、言葉に反映させやすくなるということである。しかし、それには、相手に敬意を表したり、楽しませたりするような言葉遣いを、各個人が工夫するという労力と、自らの言葉と言葉遣いがもたらす結果に対

する責任を伴わせなければならない。それは、ある意味では、敬語を原則通りに使ってさえいれば、なんとか礼儀が保てるという現状よりも、各個人が、「人と人とのコミュニケーション」に、よりエネルギーをそそぎ、積極的に関わっていくようにするということもある。

しかし、たとえ非効率的で労力がかかっても、多様な価値観を認め、人権を優先し、真の平等を目指すという意思を実現できる社会が、本当の意味での成熟した社会であると言える。その意思は、明確に意識化するとともに、「言葉」にも反映させる必要がある。ポライトネスのゆくえとは、まさに、二一世紀の社会と日本語を「どうしたいのか」という現代日本人の「意思」のゆくえでもある。

【注】

- (1) Brown, P. and Levinson, S. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- (2) Usami, M. (1999) *Discourse politeness in Japanese conversation: Some implications for a universal theory of politeness*. Doctoral dissertation, Harvard University.
- (3) 宇佐美まゆみ (2002) 「ポライトネス理論の展開―ディスコース・ポライトネスという捉え方」『日本研究教育年報二〇〇二年度版』、東京

外国語大学日本課程編、二〇一六頁
宇佐美まゆみ (2002) 予定「ディスコース・ポライトネス」における敬語使用の機能―敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの普遍理論に示唆すること」、『言語学と日本語教育2 (仮題)』、くろしお出版
宇佐美まゆみ (2002) 予定「ポライトネスの談話理論 (構想)―ディスコース・ポライトネス (DPP) という捉え方」『第7回国立国語研究所国際シンポジウム報告書―談話のポライトネス』、国立国語研究所編

(東京外国語大学外国語学部／

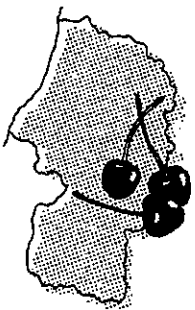
言語社会心理学・日本語教育学)

「リレー連載」日本の方言探訪

25

「山形編」

井上史雄
(いのうえ ふみお)



る。これも福島県から広がったかに見える。県境を隔ててどうして広がったのか不思議である。

さて、日本海に面する庄内地方は、東京に似たアクセントの区別があるし、「べ」を使わず共通語と同じ「う」を使うなど、新潟県との共通点多い。日本海沿いの文化圏に属するためだろう。しかし鶴岡市では最近「べ」が聞かれる。県庁所在地からの転勤者が市街地への飛び火の形で広めらるらしい。「分らない」を「ワガンネ」というラ行の「ン」への変化も流入した。

「分かない」は戦前に東京に入ったし、「べ」は今東京の若者が使うことがある。東北・北関東の方言で先に起こった変化が周囲に広がるプロセスが、山形県と東京の両方で見られるわけだ。

(東京外国語大学／社会言語学・方言学)

山形県の方言は、県内の対立意識が大きい。方言分布図を見ると、四つに分かれる傾向があり、江戸時代の藩にはば対応している。米沢市・山形市・新庄市を中心にする三つの盆地と鶴岡市・酒田市を中心にする庄内平野にあたる。

方言の違いが意識されるせいか、方言研究も盛んだった。各地の世代別の調査があるので、最近の方言の変化や広がりが実証的に示される。

山形弁は「ジャマカタ弁」と言われることもある。ヤムヨがジャジュジョに発音されることをとらえているが、この傾向は今は衰えた。

米沢・山形を含む内陸地方の大部分は、単語のアクセントの区別がなく、しゃべると独特の調子になるので、共通語を話してもすぐ分かる。これは宮城県・福島県や栃木県・茨城県あたりから広がったらしい。また内陸地方では、戦後若い世代で「ンべ」が「ッべ」「っべ」に変化した。「見よう」が昔は「ミンべ」だったのが、「ミッべ」「ミッべ」になったのが例だ。これも福島県が宮城県から入った可能性がある。一方米沢市付近では、「ほめられた」を「ホメラッチャ」というなど、ラ行とタ行が続くとラ行が変化することがあ